

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成30年3月19日

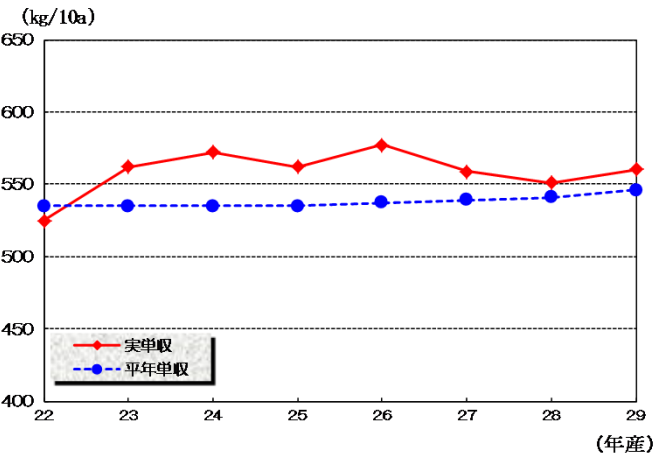
農林水産省

北海道

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

北海道における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図 1 及び表 1)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



北海道	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	525	562	572	562	577	559	551	560
平年単収	535	535	535	535	537	539	541	546
前年差	0	0	0	0	2	2	2	5

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
北海道	546	563	17	560	562

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「きらら 397」等が減少し「ななつぼし」、「ゆめぴりか」等が増加する傾向にある。(図 2 及び表 2)

(2) 栽培技術等の動向

栽培技術等の動向をみると、近年、中苗移植等から収量水準の高い成苗移植に移行し、安定した栽培が確立されつつあり、このほか育苗管理の徹底、深水管理とそれを可能とする畦畔整備、防風対策等の栽培環境整備、適正施肥等が指導されている。

図 2 品種別作付面積割合の動向

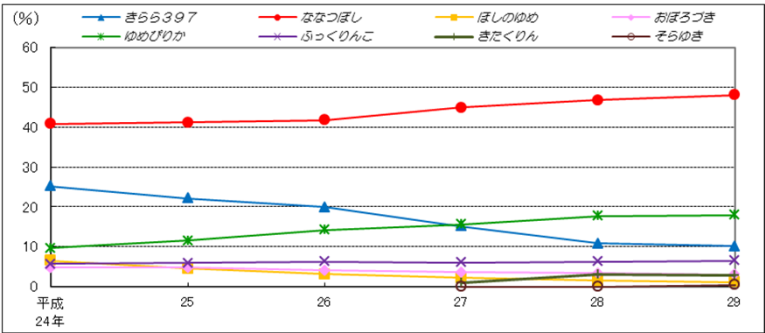


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
ななつぼし	583	41.2	41.8	44.9	46.8	48.0
きらら 3 9 7	598	22.1	19.9	15.2	10.8	10.2
ゆめぴりか	562	11.6	14.2	15.6	17.7	18.0
ほしのゆめ	568	4.6	3.2	2.2	1.5	1.2
おぼろづき	559	4.8	4.1	3.6	3.4	3.0
ふっくりんこ	566	6.0	6.3	6.1	6.3	6.5
きたくりん	563	-	-	1.1	3.0	2.9
そらゆき	646	-	-	-	-	0.5
*はくちょうもち	573	2.5	2.6	2.2	2.3	2.2
*きたゆきもち	540	1.7	1.7	1.7	1.8	1.8
*風の子もち	583	2.6	2.8	2.7	2.7	2.9

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 * はもち米である (以下同じ)。

作柄表示地帯別作付面積割合をみると、
ほぼ同水準ある。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
石 狩	549	6.9	6.9	6.9	6.8	6.9
南 空 知	557	19.9	19.7	19.1	18.3	18.1
北 空 知	581	25.6	25.3	25.4	25.5	25.6
上 川	585	26.9	27.5	28.1	28.7	28.6
留 萌	535	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1
渡 島	503	2.7	2.8	2.8	2.8	2.8
檜 山	520	3.7	3.8	3.7	3.8	3.8
後 志	540	4.4	4.4	4.3	4.3	4.3
胆 振	514	3.4	3.3	3.3	3.4	3.5
日 高	507	1.4	1.4	1.3	1.3	1.3
オホーツク・十勝	529	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年は登熟も良く、被害も少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると1㎡当たり全もみ数は減少したものの、千もみ当たり収量が2.4ポイント増加したため、10a当たり玄米重は1.5ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年度以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指）数
23	××	◎	○	105
24	○	—	◎	107
25	×	◎	○	105
26	○	—	◎	107
27	×	◎	○	104
28	—	○	○	102
29	—	○	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

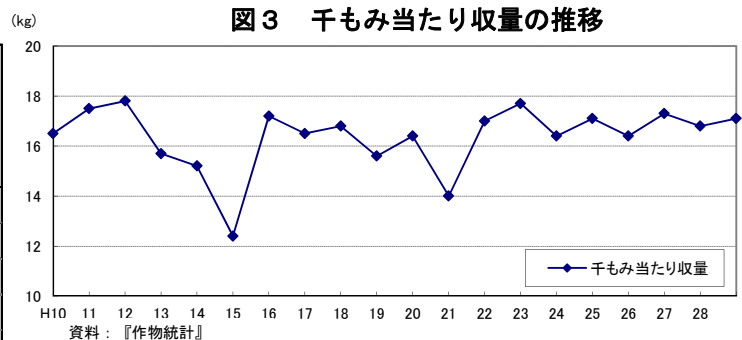
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

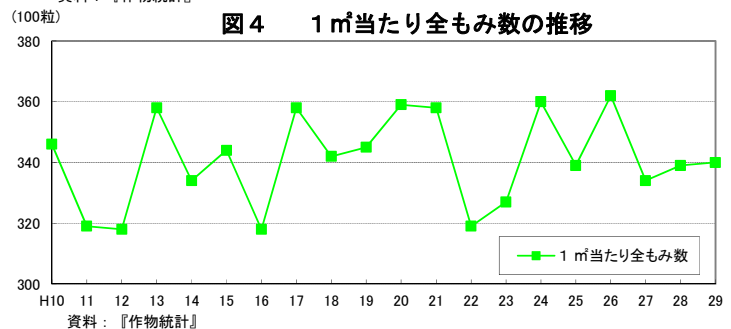
なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（北海道は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

図4 1㎡当たり全もみ数の推移



資料：『作物統計』

表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	22.4	22.3	22.4	22.1	22.2	22.0	△0.2	22.2	99.1	△0.9
1㎡当たり有効穂数(本)	555.3	562	610	559	563	538	△25	561	101.1	1.1
1穂当たりもみ数(粒)	62.3	60.3	59.3	59.7	60.2	63.2	3.0	60.1	96.5	△3.5
1㎡当たり全もみ数(百粒)	348	339	362	334	339	340	1	339	97.5	△2.5
千もみ当たり収量(g)	16.6	17.1	16.4	17.3	16.8	17.1	0.3	17.0	102.4	2.4
玄米千粒重(g)	21.7	22.1	21.9	21.7	21.6	22.1	0.5	21.9	100.9	0.9
10a当たり玄米重(kg)	570	578	595	578	568	580	12	579	101.5	1.5

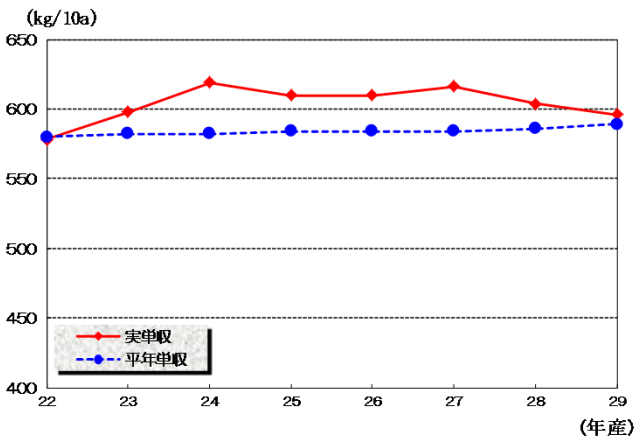
資料：「作物統計」

青 森

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

青森県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図1 及び表1)

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



青 森	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	578	598	619	610	610	616	604	596
平年単収	589	589	589	589	589	589	589	589
前年差	0	2	0	2	0	0	2	3

資料：「作物統計」

表1 平年収量と7中5平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	(参 考)	
				5 中 3 平 均	5 年 平 均
青 森	589	608	19	608	607

単位：kg

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「つがるロマン」から、収量水準の高い「まっしぐら」が増加傾向にあり、この2品種で約9割を占めている。(図2 及び表2)

(2) 栽培技術等の動向

良食味・高品質米の安定生産（気象に左右されない米づくり）に向け、適正な肥培管理や水管理、適期移植、土作りの推進と適正な施肥等が指導されるなど、安定栽培技術の普及・定着が図られている。

なお、施肥後30日程度の肥効抑制期間で分げつが抑制され、慣行栽培に比べ、穂数の減少傾向が強いことから、即効性肥料も併せて施用する農家が多くある。

図2 品種別作付面積割合の動向

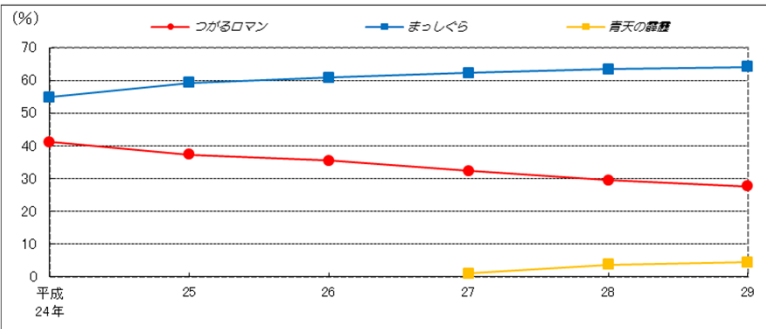


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
つがるロマン	602	37.3	35.5	32.4	29.5	27.6
まっしぐら	614	59.3	60.8	62.3	63.4	64.1
青天の霹靂	540	-	-	1.3	3.7	4.4

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

作柄地帯別作付面積割合をみると、飼料用米生産の関係から、収量水準の低い南部・下北地帯は減少傾向、収量水準の高い津軽地帯が増加傾向、となっている。（表3）

地帯（地域）名	（参考） 10a当たり 収量水準 （kg）	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
青 森	593	11.1	10.9	11.0	11.2	11.3
津 軽	631	59.1	59.6	61.8	62.2	61.8
南部・下北	566	29.8	29.5	27.2	26.6	26.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年は登熟も良く、被害も少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が3.4ポイント増加したため、10a当たり玄米重は1.1ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年度以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
23	×	◎	○	103
24	—	◎	◎	106
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	104
27	—	○	○	105
28	—	○	○	104
29	◎	×	—	101

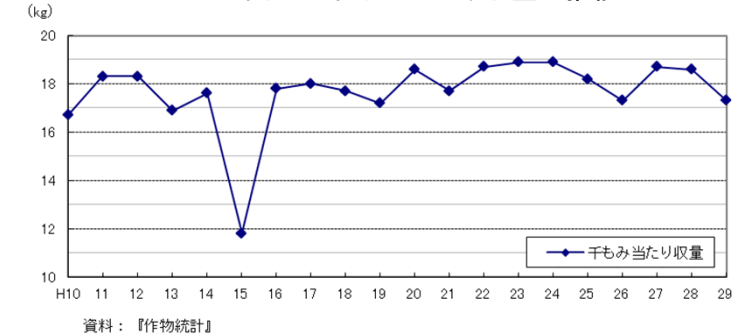
注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い
なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（青森は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	20.9	20.1	19.8	19.6	19.5	19.5	0.0	19.6	93.8	△ 6.2
1㎡当たり有効穂数（本）	410	411	446	452	427	421	△ 6	431	105.2	5.2
1穂当たりもみ数（粒）	80.7	83.0	80.7	74.1	77.3	83.8	6.5	80.3	99.5	△ 0.5
1㎡当たり全もみ数（百粒）	332	341	360	335	330	353	23	343	103.4	3.4
千もみ当たり収量（g）	18.7	18.2	17.3	18.7	18.6	17.3	△ 1.3	18.0	96.3	△ 3.7
玄米千粒重（g）	22.3	21.8	22.2	22.7	22.0	22.6	0.6	22.3	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	613	622	622	627	615	610	△ 5	620	101.1	1.1

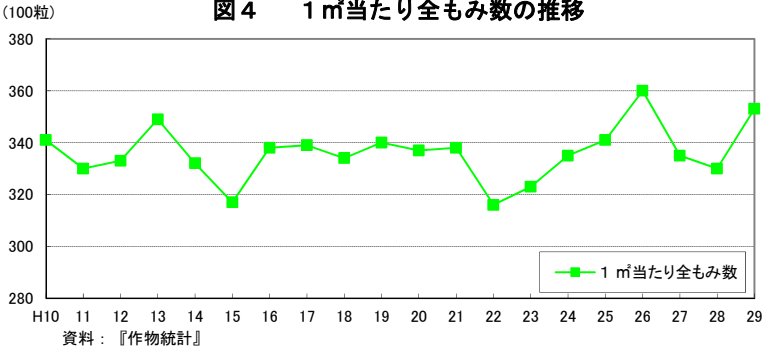
資料：「作物統計」

図3 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

図4 1㎡当たり全もみ数の推移



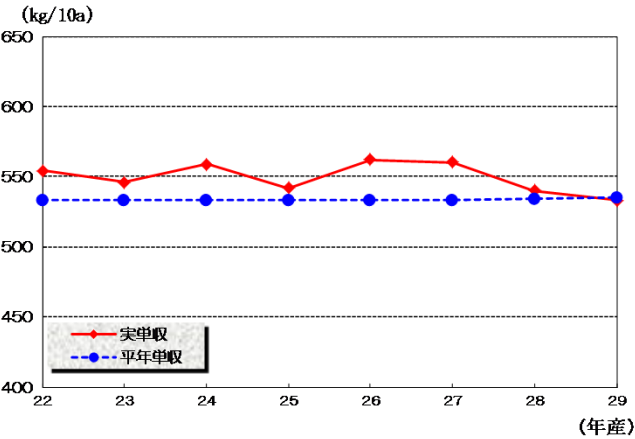
資料：『作物統計』

岩 手

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

岩手県における近年の10 a 当たり収量については、おおむね平年収量を上回って推移している。（図 1 及び表 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



岩 手	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	554	546	559	542	562	560	540	533
平年単収	533	533	533	533	533	533	534	535
前年差	0	0	0	0	0	0	1	1

資料：『作物統計』

表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③＝②－①	単位：kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か年 平 均
岩 手	535	549	14	547	547

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」が 7 割を占め「あきたこまち」が減少傾向にある。

また、岩手県のオリジナル品種である「銀河のしずく」が増加している。（図 2 及び表 2）

(2) 栽培技術等の動向

適正な施肥や病虫害発生予察情報に基づく効率的な防除による生産コストの低下、低温障害回避のための適期移植と生育ステージに基づいた水管理及び適期収穫が指導されるなど、安定生産と品質向上の取組みが図られている。

図 2 品種別作付面積割合の動向

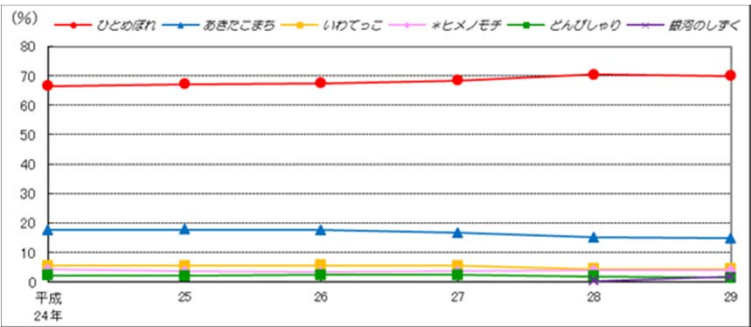


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
ひとめぼれ	560	67.2	67.5	68.4	70.5	70.0
あきたこまち	562	17.7	17.5	16.7	15.1	14.7
いわてっこ	537	5.5	5.6	5.4	4.4	4.4
どんびしゃり	645	2.0	2.4	2.3	1.8	1.4
かけはし	508	0.7	0.7	0.6	0.5	0.4
*ヒメノモチ	566	3.6	3.3	3.6	3.9	3.7
銀河のしずく	587	-	-	-	0.3	1.7

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準の高い北上川上流地帯が27年以降、増加傾向となっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
北上川上流	573	24.9	24.5	23.6	23.7	24.0
北上川下流	546	67.5	68.1	69.4	69.3	68.9
東 部	490	2.5	2.7	2.7	2.7	2.7
北 部	512	5.1	4.7	4.3	4.3	4.4

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年は登熟も良く、被害も少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が0.9ポイント増加したため、10a当たり玄米重は0.1ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年度以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最 況終指 数）
23	—	○	○	102
24	—	○	○	105
25	○	—	○	102
26	◎	×	○	105
27	—	○	○	105
28	×	○	—	102
29	○	×	—	98

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（岩手は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移

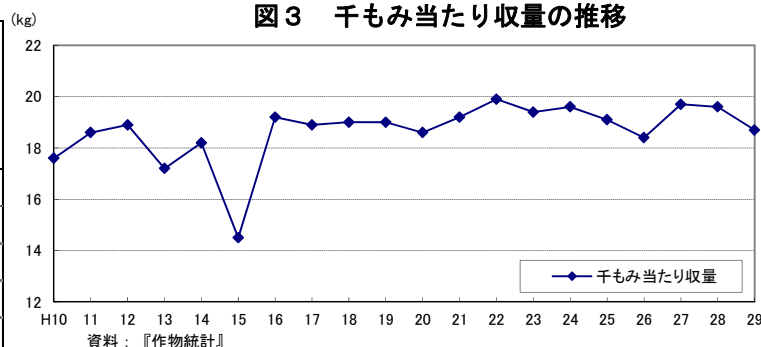


図4 1㎡当たり全もみ数の推移

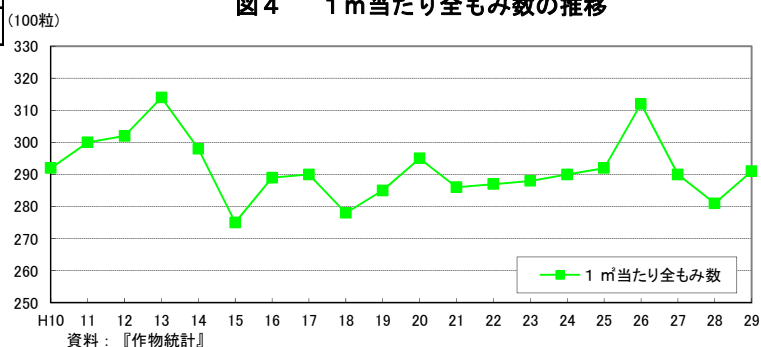


表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	18.5	18.0	18.0	17.6	17.6	17.5	△0.1	17.7	95.7	△4.3
1㎡当たり有効穂数(本)	429.3	420	463	468	426	440	14	443	103.2	3.2
1穂当たりもみ数(粒)	67.1	69.5	67.4	62.0	66.0	66.1	0.1	66.5	99.1	△0.9
1㎡当たり全もみ数(百粒)	288	292	312	290	281	291	10	291	100.9	0.9
千もみ当たり収量(g)	19.4	19.1	18.4	19.7	19.6	18.7	△0.9	19.1	98.5	△1.5
玄米千粒重(g)	21.8	21.6	21.7	22.4	21.8	21.9	0.1	21.8	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	559	557	573	572	550	543	△7	560	100.1	0.1

資料：「作物統計」

宮 城

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

宮城県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図 1 及び表 1)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準

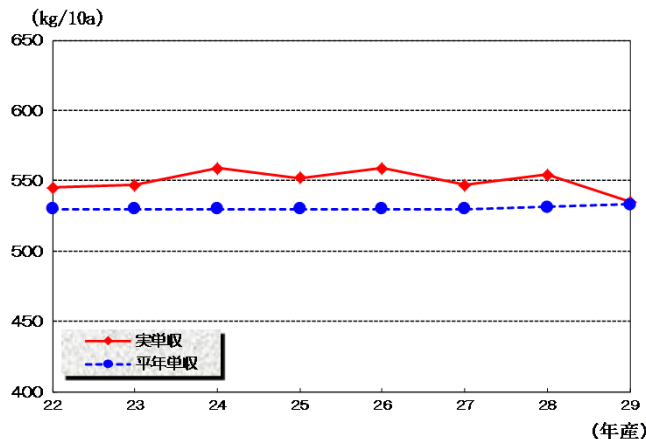


表 1 平年収量と 7 中 5 平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	単位: kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か年 平 均
宮 城	533	552	19	551	549

宮 城	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	545	547	559	552	559	547	554	535
平年単収	530	530	530	530	530	530	531	533
前年差	0	0	0	0	0	0	1	2

資料: 『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「ひとめぼれ」が 7 割を占め、近年、収量水準の高い「つや姫」が増加傾向にある。
(図 2 及び表 2)

(2) 栽培技術等の動向

高良質・良食味米の安定生産技術の普及、土壌分析に基づく適性施肥と耕畜連携による土作り、適性な病虫害防除等の徹底が指導されている。また、高温による登熟不良及び異常低温による障害不稔による品質・収量低下を軽減させるため、遅植えを推進している。

図 2 品種別作付面積割合の動向

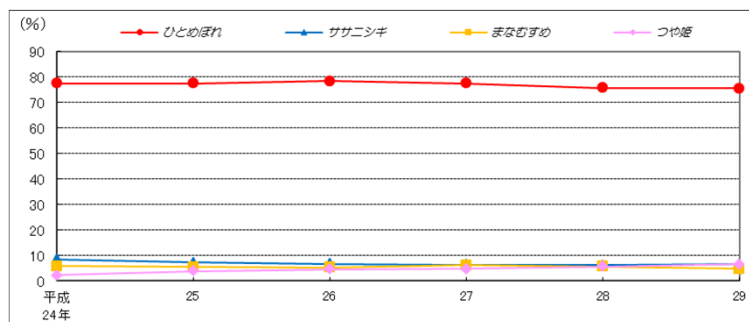


表 2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
ひとめぼれ	559	77.4	78.3	77.4	75.7	75.5
ササニシキ	571	7.3	6.7	6.3	6.2	6.5
まなむすめ	585	5.5	5.3	6.2	5.6	4.8
コシヒカリ	506	1.5	1.3	1.3	1.2	0.9
つ や 姫	578	3.9	4.5	4.7	5.6	6.5

資料: 水稲作況調査結果等

注: 1 10a 当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準の低い南部地帯が減少し、中部・東部地帯が増加傾向となっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
南 部	530	10.5	10.5	10.6	10.5	10.3
中 部	537	17.6	17.5	17.7	18.4	18.3
北 部	559	60.2	60.2	60.0	59.1	59.3
東 部	555	11.7	11.8	11.7	12.0	12.0

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年の登熟は平成29年は不良であるものの、おおむね平年並で被害は少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が4.5ポイント増加したため、10a当たり玄米重は2.0ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年産以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況最終指数）
23	○	—	○	103
24	—	○	○	105
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	105
27	○	×	○	103
28	○	—	○	105
29	○	××	—	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふり目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふり目幅（宮城は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移

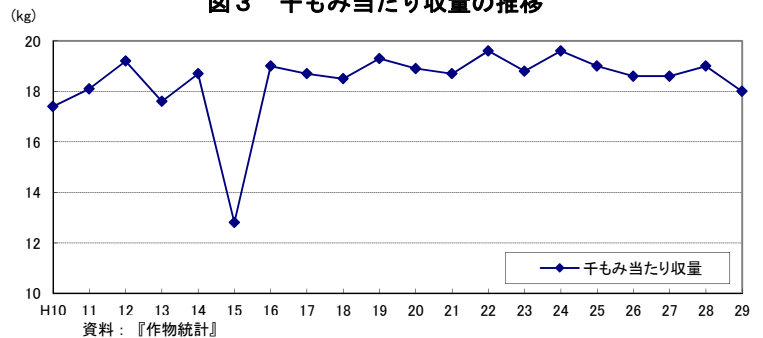


図4 1㎡当たり全もみ数の推移

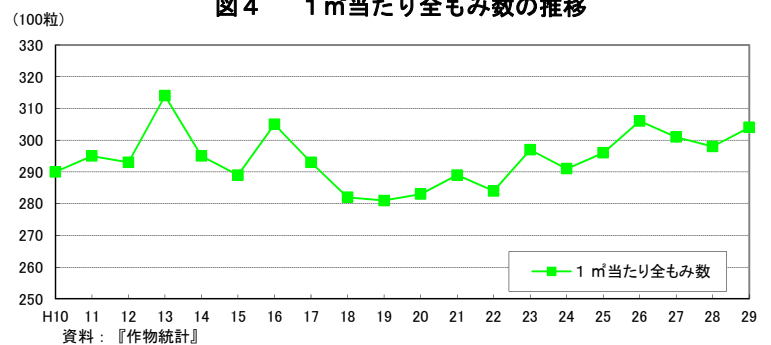


表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	18.0	17.6	17.6	17.4	17.2	17.1	△0.1	17.4	96.7	△3.3
1㎡当たり有効穂数(本)	437.3	427	453	463	439	460	21	451	103.1	3.1
1穂当たりもみ数(粒)	66.4	69.3	67.5	65.0	67.9	66.1	△1.8	67.2	101.2	1.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	288	296	306	301	298	304	6	301	104.5	4.5
千もみ当たり収量(g)	19.1	19.0	18.6	18.6	19.0	18.0	△1.0	18.7	97.9	△2.1
玄米千粒重(g)	21.9	20.9	21.4	21.8	21.5	21.8	0.3	21.6	98.6	△1.4
10a当たり玄米重(kg)	552	563	570	559	566	546	△20	563	102.0	2.0

資料：「作物統計」

山 形

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

山形県における近年の10 a 当たり収量については、平成24年以降平年収量を上回って推移している。（図1 及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準

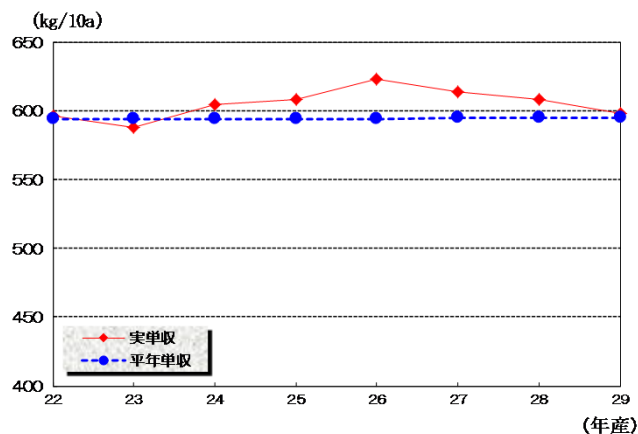


表1 平年収量と7中5平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③=②-①	単位：kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
				610	610
山 形	595	606	11		

山 形	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	596	588	604	608	623	614	608	598
平年単収	594	594	594	594	594	595	595	595
前年差	0	0	0	0	0	1	0	0

資料：『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「はえぬき」が6割を占めるものの、「コシヒカリ」等が減少し、近年、収量水準の高い「つや姫」が増加傾向にある。

また、山形県のオリジナル品種である「雪若丸」の作付けが始まった。（図2 及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

作土深の確保など土作りを推進しながら、適性phの確認による健苗育成、適切な水管理、適正な施肥等の基本的な技術を徹底する等の指導がされている。

図2 品種別作付面積割合の動向

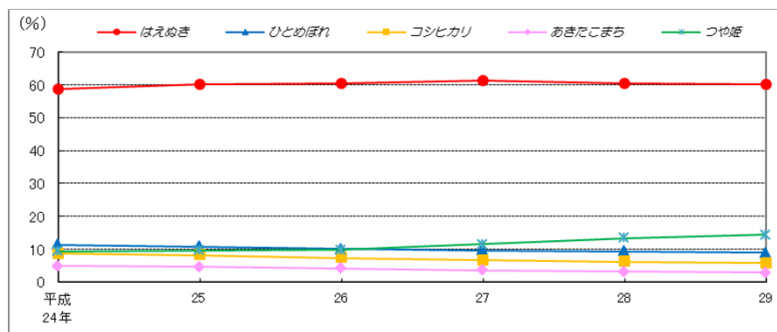


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
はえぬき	623	60.1	60.4	61.3	60.3	60.1
つや姫	605	9.6	9.8	11.5	13.3	14.4
ひとめぼれ	587	10.8	10.1	9.6	9.3	8.9
コシヒカリ	562	8.2	7.3	6.6	6.2	5.8
雪若丸	614	-	-	-	-	0.1
あきたこまち	542	4.6	4.1	3.6	3.2	2.8

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
ほぼ横ばいとなっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
村山	623	23.0	22.8	22.8	22.8	22.8
最上	585	16.3	16.1	16.2	16.2	16.0
置賜	611	20.6	20.6	20.7	20.6	20.6
庄内	604	40.1	40.5	40.3	40.4	40.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年の登熟はおおむね平年並であるものの、被害は少ない状況となっている。
収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり
収量は同水準であったものの、1㎡当たり全もみ数は2.3ポイント増加したため、10a
当たり玄米重は2.1ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年産以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指数）
23	—	—	—	99
24	—	○	—	102
25	—	○	—	102
26	◎	×	○	105
27	○	—	○	103
28	○	—	○	103
29	○	×	—	100

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（山形は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移

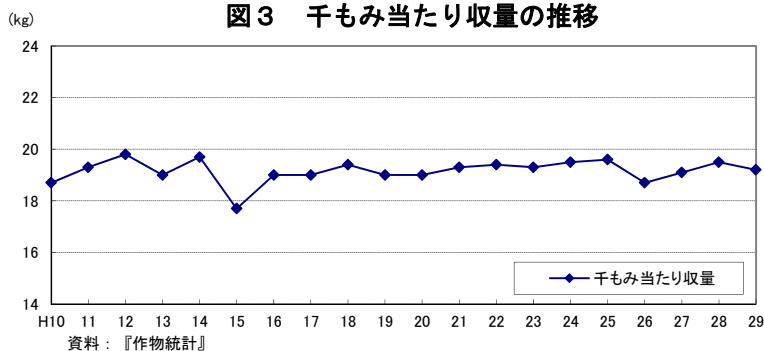


図4 1㎡当たり全もみ数の推移

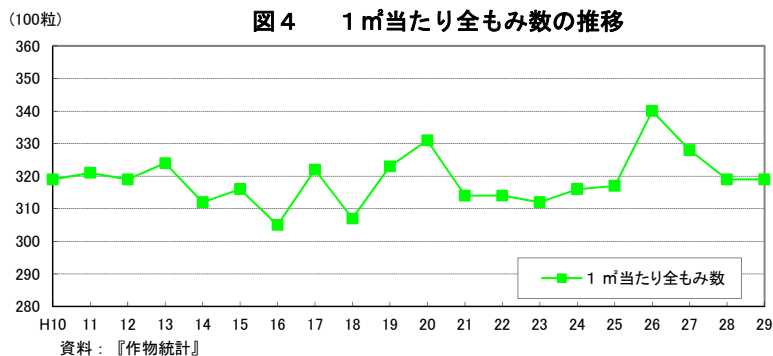


表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	19.7	19.2	19.5	19.4	19.4	19.3	△ 0.1	19.4	98.5	△ 1.5
1㎡当たり有効穂数（本）	468.3	458	514	524	470	473	3	486	103.7	3.7
1穂当たりもみ数（粒）	68.0	69.2	66.1	62.6	67.9	67.4	△ 0.5	67.1	98.7	△ 1.3
1㎡当たり全もみ数（百粒）	315	317	340	328	319	319	0	322	102.3	2.3
千もみ当たり収量（g）	19.3	19.6	18.7	19.1	19.5	19.2	△ 0.3	19.3	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	21.8	21.9	21.5	21.7	21.6	22.1	0.5	21.7	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	610	621	636	628	621	611	△ 10	623	102.1	2.1

資料：「作物統計」

福島

1 近年の10a当たり収量等の水準

福島県における近年の10a当たり収量については、平年収量は上回って推移している。
(図1及び表1)

図1 近年の10a当たり収量と平年収量的水準

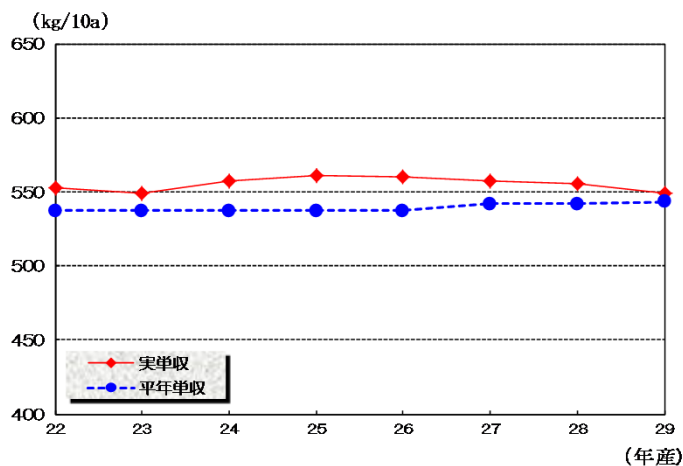


表1 平年収量と7中5平均対差等

	29年産 平年収量 ①	7中5 平均 ②	平年収量 との差 ③=②-①	(参考)	
				5中3 平均	5か年 平均
福島	543	556	13	557	556

単位：kg

福島	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	553	549	557	561	560	557	555	549
平年単収	537	537	537	537	537	542	542	543
前年差	0	0	0	0	0	5	0	1

資料：『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」がおおむね6割を占めるものの、近年、収量水準の高い「天のつぶ」が増加傾向にある。

(図2及び表2)

図2 品種別作付面積割合の動向

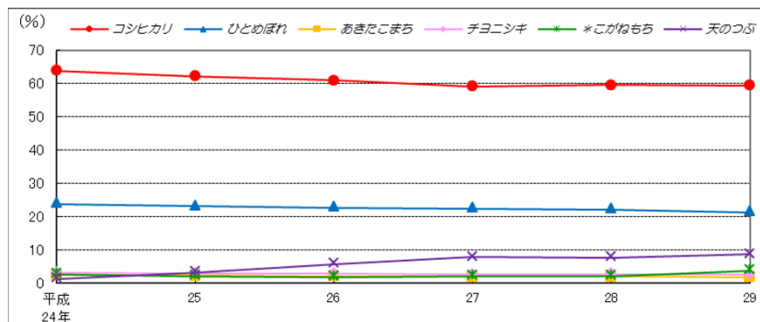


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
コシヒカリ	561	62.2	61.0	59.2	59.6	59.4
ひとめぼれ	584	23.1	22.7	22.5	22.2	21.4
天のつぶ	606	3.3	5.8	7.9	7.7	8.7
*こがねもち	526	2.2	1.9	2.2	2.2	3.8

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
収量水準の高い会津地帯が増加傾向
となっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
中通り	537	56.5	56.7	55.9	55.8	55.5
浜通り	515	9.2	9.9	10.1	9.4	9.9
会 津	597	34.3	33.4	34.0	34.8	34.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年の登熟は平年並みでは被害は少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ
当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数は4.7ポイント増加したため、10a当
たり玄米重は1.7ポイント増加している。（表3、表4、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年度以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指）数
23	—	○	○	102
24	—	○	○	104
25	○	—	○	104
26	◎	×	○	104
27	○	×	○	101
28	—	○	○	102
29	○	×	—	100

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が使用しているふり目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふり目幅（福島は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移

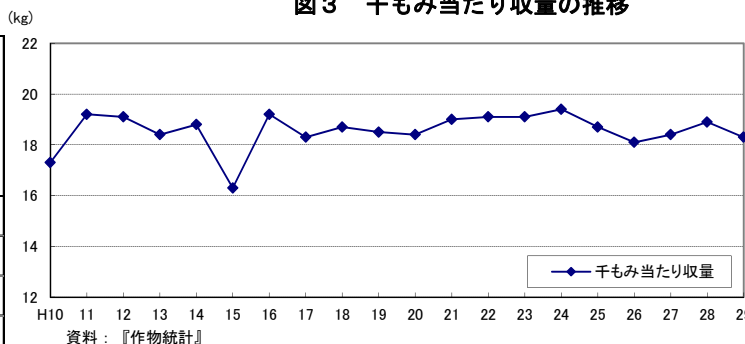


図4 1㎡当たり全もみ数の推移

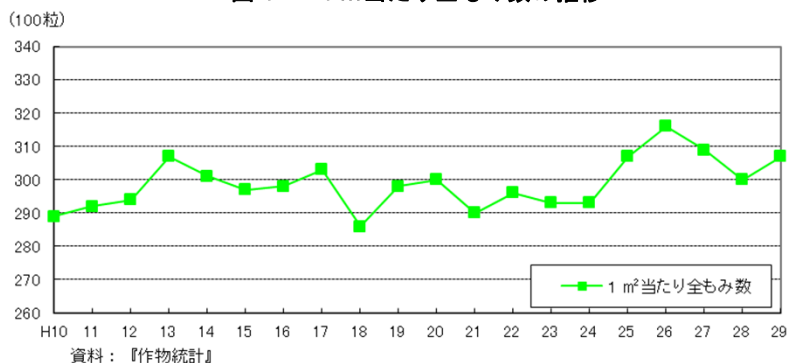


表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	17.9	17.4	17.4	17.3	17.2	17.1	△ 0.1	17.3	96.6	△ 3.4
1㎡当たり有効穂数（本）	384.7	399	415	420	395	405	10	406	105.6	5.6
1穂当たりもみ数（粒）	76.1	76.9	76.1	73.6	75.9	75.8	△ 0.1	75.9	99.7	△ 0.3
1㎡当たり全もみ数（百粒）	294	307	316	309	300	307	7	308	104.7	4.7
千もみ当たり収量（g）	19.1	18.7	18.1	18.4	18.9	18.3	△ 0.6	18.5	96.9	△ 3.1
玄米千粒重（g）	22.0	21.9	21.6	22.2	21.7	21.9	0.2	21.8	99.1	△ 0.9
10a当たり玄米重（kg）	559	573	571	568	567	561	△ 6	569	101.7	1.7

資料：「作物統計」

千 葉

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

千葉県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。
(図1及び表1)

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準

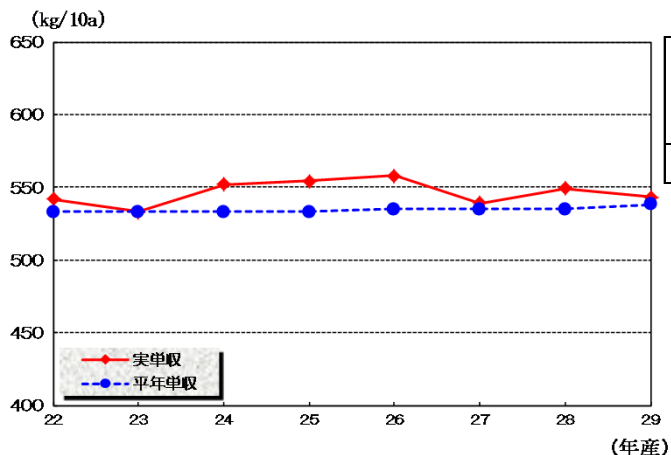


表1 平年収量と7中5平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③ = ② - ①	単位: kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
千 葉	538	547	9	549	549

千 葉	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	542	533	552	554	558	539	549	543
平年単収	533	533	533	533	535	535	535	538
前年差	0	0	0	0	2	0	0	3

資料: 『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」が6割を占め、近年収量水準の高い「ふさこがね」、「ふさおとめ」が増加傾向にある。(図2及び表2)

(2) 栽培技術等の動向

土作りの推進と適正な施肥・水管理の徹底等の指導がされている。

図2 品種別作付面積割合の動向

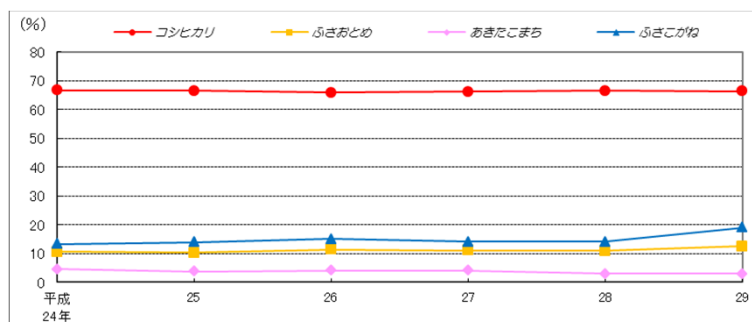


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
コシヒカリ	532	66.5	65.8	66.1	66.4	63.6
ふさこがね	598	13.9	15.0	14.0	14.0	19.0
ふさおとめ	564	10.3	11.4	11.0	10.8	12.5
あきたこまち	555	3.7	4.0	4.0	3.0	2.9

資料: 水稻作況調査結果等

注: 1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準の低い南房総地帯が減少傾向となっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
京 葉	529	27.3	27.2	27.4	27.4	27.4
九十九里	566	51.6	51.9	51.6	51.9	52.0
南 房 総	527	21.1	20.9	21.0	20.7	20.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

近年の登熟はほぼ平年並で被害は少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は減少したものの、1㎡当たり全もみ数が3.2ポイント増加したため、10a当たり玄米重は1.4ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年産以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作最況終指数）数
23	—	○	—	100
24	○	—	○	104
25	○	—	○	104
26	○	—	○	104
27	○	×	—	101
28	○	—	—	102
29	○	×	—	100

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（千葉は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移

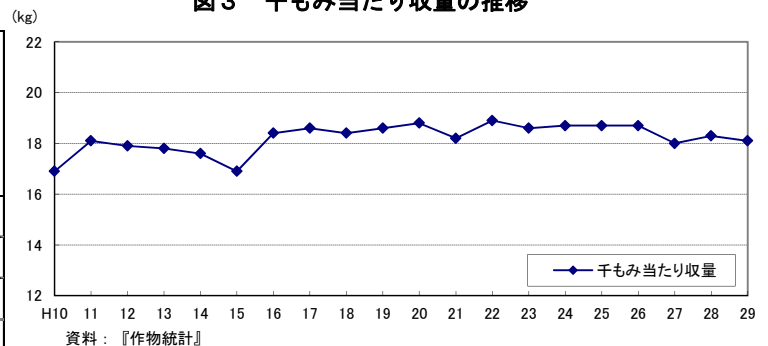


図4 1㎡当たり全もみ数の推移

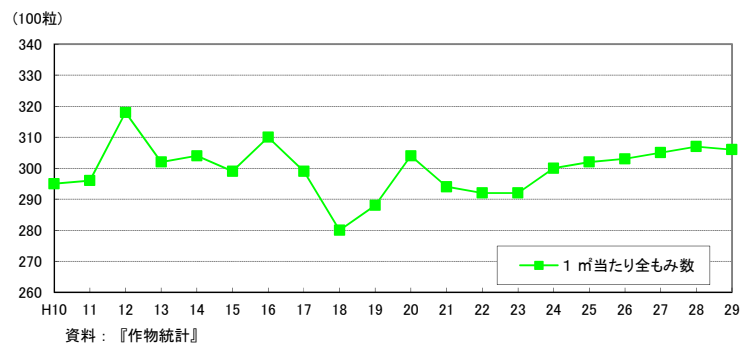


表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.7	16.3	16.3	16.1	16.1	16.0	△0.1	16.2	97.0	△3.0
1㎡当たり有効穂数（本）	379.3	374	386	386	372	394	22	382	100.7	0.7
1穂当たりもみ数（粒）	78.2	80.7	78.5	79.0	82.5	77.7	△4.8	79.4	101.5	1.5
1㎡当たり全もみ数（百粒）	295	302	303	305	307	306	△1	305	103.2	3.2
千もみ当たり収量（g）	18.7	18.7	18.7	18.0	18.3	18.1	△0.2	18.4	98.4	△1.6
玄米千粒重（g）	21.4	21.2	21.5	20.7	22.0	21.7	△0.3	21.5	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	552	564	568	549	562	553	△9	560	101.4	1.4

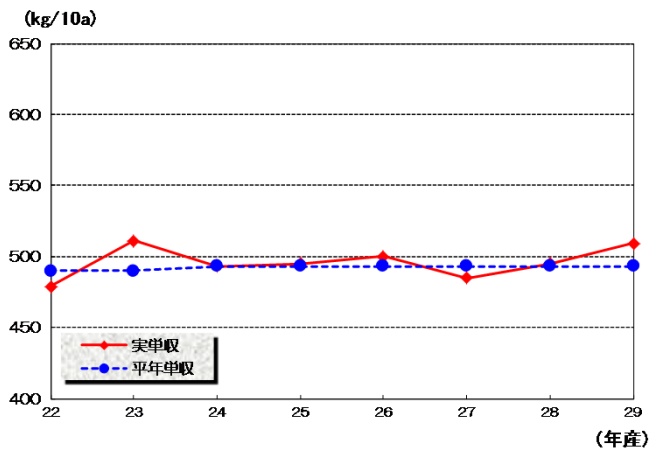
資料：「作物統計」

神奈川

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

神奈川県における近年の10 a 当たり収量については、おおむね平年収量と近似して推移している。（図1及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準



神奈川	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	479	511	493	495	500	485	495	509
平年単収	490	490	493	493	493	493	493	493
前年差	2	0	3	0	0	0	0	0

資料：『作物統計』

表1 平年収量と7中5平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 との 差 ③=②-①	単位：kg (参 考)	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
神奈川	493	498	5	497	497

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量の水準の低い「キヌヒカリ」が減少傾向であり、近年収量水準の高い「はるみ」が増加傾向にある。（図2及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

良質・良食味米を促進するため、登熟歩合の向上や登熟期間の障害軽減のための穂肥適期施用等の指導がされている。

また、「はるみ」は「キヌヒカリ」より穂数が多い傾向にあるため、株間を確保するため広めに移植を行うこととしている。

図2 品種別作付面積割合の動向

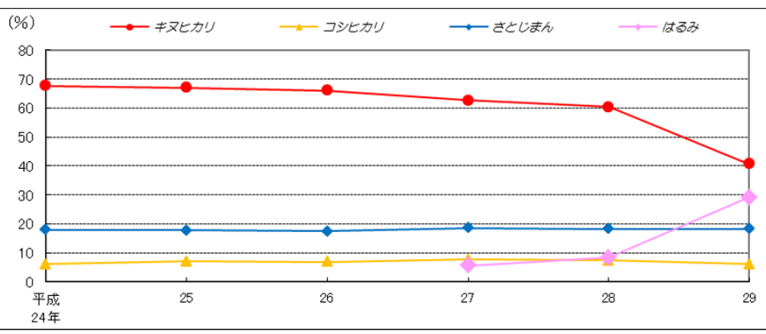


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
キヌヒカリ	492	67.0	66.1	62.6	60.3	40.7
さとじまん	522	17.8	17.4	18.5	18.2	18.3
コシヒカリ	497	7.0	6.8	7.6	7.3	6.1
はるみ	507	-	-	5.6	8.4	29.2

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

平成29年の登熟は悪かったものの、そのほかの年はほぼ平年並で被害は少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると1㎡当たり全もみ数が増加しており、近年の千もみ当たり収量の推移をみると上昇傾向にある。

(表3、表4、図3及び図4)

表3 最近の作柄（平成23年度以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
23	○	—	○	104
24	×	—	○	100
25	○	×	—	100
26	○	—	—	101
27	—	×	×	98
28	—	○	—	100
29	○	×	—	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み
 ×：やや多い ××：多い
 なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が使用しているふり目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふり目幅（千葉は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移

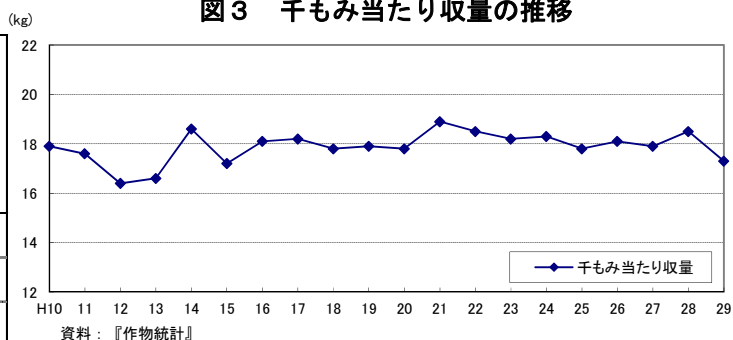


図4 1㎡当たり全もみ数の推移

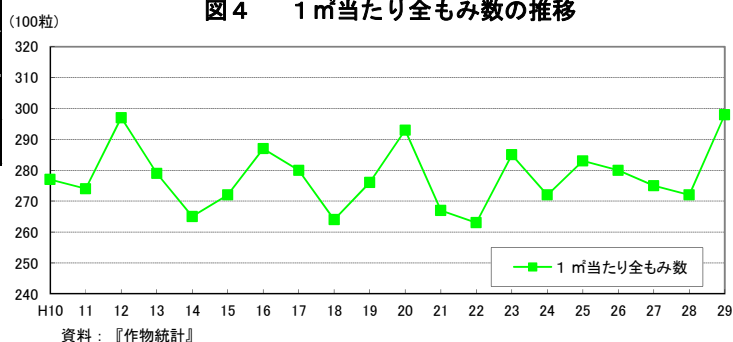


表4 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	17.4	17.8	17.2	17.1	17.5	17.0	△ 0.5	17.3	99.4	△ 0.6
1㎡当たり有効穂数(本)	341.7	343	344	342	329	360	31	343	100.4	0.4
1穂当たりもみ数(粒)	80.4	82.5	81.4	80.4	82.7	82.8	0.1	82.2	102.2	2.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	275	283	280	275	272	298	26	279	101.7	1.7
千もみ当たり収量(g)	18.3	17.8	18.1	17.9	18.5	17.3	△ 1.2	17.9	97.8	△ 2.2
玄米千粒重(g)	21.2	21.4	21.3	20.9	22.0	21.1	△ 0.9	21.3	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	507	503	507	491	502	516	14	504	99.4	△ 0.6

島 根

1 近年の10 a 当たり収量等の水準

島根県における近年の10 a 当たり収量については、23年以降を見ると26年及び27年は平年収量を下回ったものの、その他の年は上回って推移している。（図1及び表1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量的水準

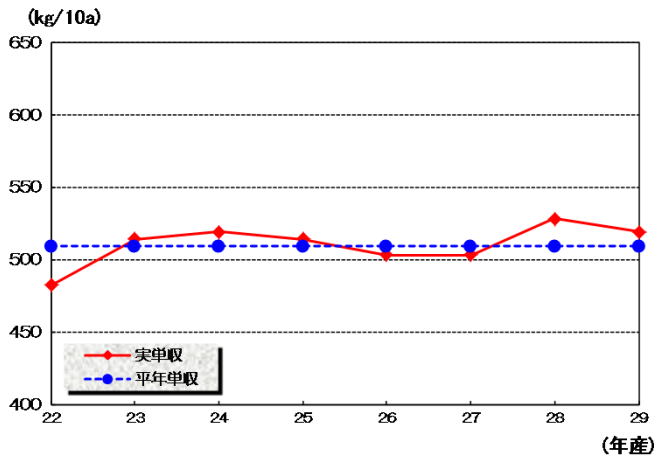


表1 平年収量と7中5平均対差等

	29 年 産 平年収量 ①	7 中 5 平 均 ②	平年収量 と の 差 ③ = ② - ①	（参 考）	
				5 中 3 平 均	5 か 年 平 均
島 根	509	514	5	512	513

島 根	22	23	24	25	26	27	28	29
実単収	482	514	519	514	503	503	528	519
平年単収	509	509	509	509	509	509	509	509
前年差	0	0	0	0	0	0	0	0

資料：『作物統計』

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」が6割を占めるものの、減少傾向にあり、収量水準の高い「きぬむすめ」が増加傾向にある。

（図2及び表2）

(2) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、土作りと基本技術の徹底による気象変動の影響を受けにくい稲体づくりとして、①たい肥等の有機物施用、②薄まきによる健苗育成、③適正な肥培管理の励行等の取組みが図られている。

図2 品種別作付面積割合の動向

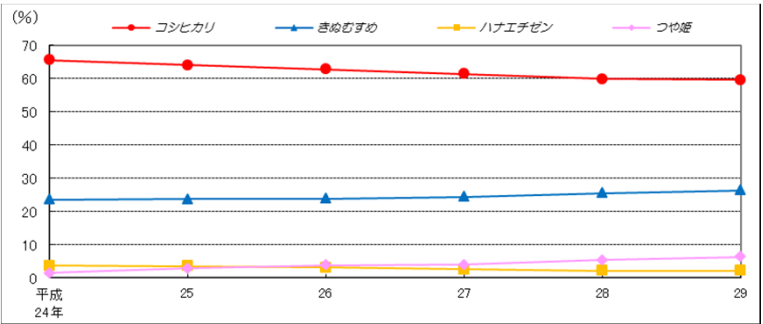


表2 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a 当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H25	26	27	28	29
コシヒカリ	500	64.0	62.8	61.4	59.8	59.6
きぬむすめ	555	23.7	23.8	24.4	25.5	26.4
つや姫	534	2.8	3.8	4.0	5.3	6.3
ハナエチゼン	509	3.6	3.1	2.5	2.2	2.1
*ヒメノモチ	516	1.1	1.2	1.4	1.5	1.5

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a 当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準の高い出雲地帯が増加傾向となっている。（表3）

表3 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	（参考） 10a当たり 収量水準 （kg）	年次別作付面積割合（％）				
		H25	26	27	28	29
出 雲	518	68.2	68.4	68.5	68.7	69.1
石 見	503	31.8	31.6	31.5	31.3	30.9

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 近年の作柄

平成26年及び27年は登熟が悪く、被害も多かったものの、それ以外の年についてはおおむね登熟が良く、被害は少ない状況となっている。

収量構成要素については、平成20～24年と25～29年の各5中3平均で比較すると千もみ当たり収量は少なかったものの、1㎡当たり全もみ数が5.0ポイント増加したため、10a当たり玄米重は1.2ポイント増加している。（表4、表5、図3及び図4）

表4 最近の作柄（平成23年産以降）

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
23	○	×	—	101
24	—	○	○	102
25	○	×	—	101
26	◎	××	×	99
27	—	×	×	99
28	—	○	○	104
29	○	—	○	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平年並み

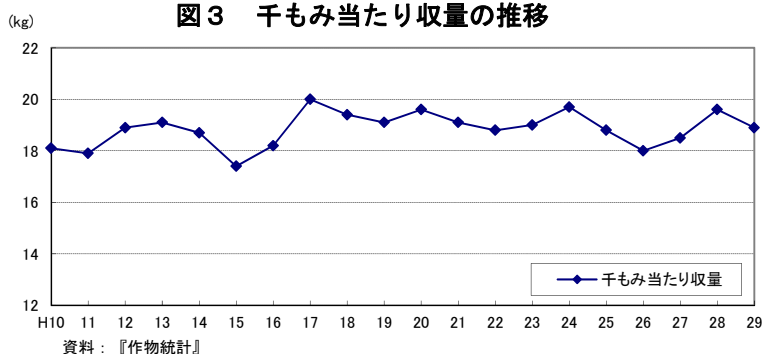
×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）

ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平年並み

×：やや多い ××：多い

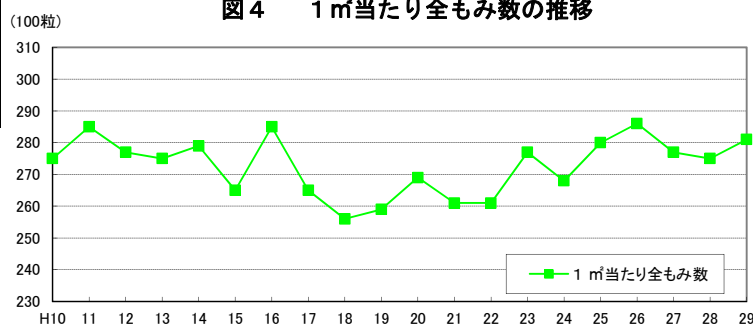
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（島根は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

図3 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

図4 1㎡当たり全もみ数の推移



資料：『作物統計』

表5 収量構成要素

	20～24年 5中3 ①	平成 25年	26	27	28	29	対前年差	25～29年 5中3 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	17.3	17.1	16.7	16.6	16.8	16.2	△ 0.6	16.7	96.5	△ 3.5
1㎡当たり有効穂数（本）	346	346	356	354	339	368	29	352	101.7	1.7
1穂当たりもみ数（粒）	77.6	80.9	80.3	78.2	81.1	76.4	△ 4.7	79.8	102.8	2.8
1㎡当たり全もみ数（百粒）	266	280	286	277	275	281	6	279	105.0	5.0
千もみ当たり収量（g）	19.2	18.8	18.0	18.5	19.6	18.9	△ 0.7	18.7	97.4	△ 2.6
玄米千粒重（g）	21.9	21.8	22.1	21.5	22.1	22.3	0.2	22.0	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	518	527	516	513	539	530	△ 9	524	101.2	1.2

資料：「作物統計」